〔年中行事秘抄正月〕七日節會及叙位事

白馬事　十節云、馬性以白爲本、天有白龍、地有白馬、是日見白馬、卽年中邪氣遠去不來、○略中

帝皇世紀云、高辛氏之子、以正月七日恒登崗、命青衣人分列青馬七疋、調青陽之氣、馬者主陽、青者主春、崗者萬物之始、人主之居、七者七耀之清徵、陽氣之溫始也、

〔看聞日記〕應永二十六年正月十三日、經時朝臣參賀、對面暫雜談、白馬節會號青馬事、根元御不審之由、室町殿○足利義持諸人ニ有御尋、誰も不存知云々、仙洞へ被尋申、其も無分明之御返事、一條亞相○兼良有御尋、寛平法皇御記ニ有此事、被注進之間御悅喜云々、如此事存知之人、當時希有事歟、

〔公事根源正月〕白馬節會　七日

白馬の節會を、あるひは青馬の節會とも申なり、其故は、馬は陽の獸なり、青は春の色なり、是によりて正月七日に青馬をみれば、年中の邪氣をのぞくといふ本文侍なり、仁明の御門、承和元年正月に、豐樂院におはしまして、青馬を見給、同六年正月には、紫宸殿にて御覽せらるされば此馬の事、禮記に春を東郊にむかへて、青馬七疋を用るとあり、七は少陽の數、正月は少陽の月なり、又十節記に白馬を馬の性の本とす、天に白龍有、地に白馬有、又天の用は龍なり、地の用は馬也、人の用は龜也と申本文も侍にや、今の節會には、三七廿一疋をひかるゝなり、是は三は三陽にかたどる、七は七日にあへるよし、寛平の御記にのせられたり、今日の毛つけの奏にも、皆あし毛とばかり有、是白馬をもといせる故也、

〔世諺問答〕正月　問て云、けふおほやけにて、白馬をみ給ふは、何のいはれぞや、答、十節記に、白馬を馬の性の本とす、天に白龍あり、地に白馬あり、また天の用は龍なり、地の用は馬なりと申本文あり、また禮記といふ文に、春を東郊にむかへて、青馬七疋をもちゆるとみえ侍りし、また白馬を青馬と申侍は、陽の獸なり、青は春の色なり、きはめて白き物は、青ざめてみゆるものなり、されば